

園番号 627

## 令和6年度 奈良市立六条幼稚園 研究実践概要

園長名 岡田 由美子  
全園児数 22名

### 1. 研究主題

「豊かな体験を通し、主体的に活動する子どもを育てる」  
～身近な環境とのかかわりの中で～

### 2. 研究年度

初年度

### 3. 研究主題設定理由

子どもが主体的に活動するには、日々の生活の中での豊かな体験ができる環境や、子ども一人一人の実態を把握した保育者とのかかわりに要因があると考えた。子どもの発達や成長段階を踏まえ、豊かな感性を育む保育内容の工夫を行いながら研究を進めていくことにした。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

子どもがどのような環境やかかわりの中で、主体的に活動しているかを捉え、環境構成や援助の在り方を探る。

#### ②研究の重点

実践より子どもの姿を分析し、遊びの中で主体的に活動する子どもの姿を環境構成や、保育者とのかかわりについて共通認識する。また保育者間で遊びを振り返り、様々な視点から遊びを見取る。

#### ③活動の方法

遊びの中で子どもが主体的に活動する姿や、その要因となるきっかけになった場面を捉え、事例を挙げて職員間で話し合いの場をもち、研究を進めていった。

〔主体的に活動する子どもの姿…  
保育者とのかかわり…〕

【4歳児】 6月 バスボムみたい！

(ねらい) 泥や水の感触を味わいながら遊びを楽しむ。

砂場の泥でごちそうづくりをしていたA児が、トレイに泥を丸く形を整えて並べていた。翌日も遊びの続きができるように、トレイに丸く固めた泥を並べて置いたところ、泥が乾燥して固まっていた。A児が固まったものを手に取ると、欠片が取れて、他の子が遊んでいた砂場の泥水の中に落ちた。固まった泥が水を含み崩れて溶けたように見えたA児は「バスボムみたい！」と大きな声で嬉しそうに保育者に伝えた。「泥んこの中だと見えないから、バケツに水を入れてお風呂みたいにしてみる？」と保育者が提案する

と「そうする！」と言って水を汲み、泥の塊が水の中で溶けることを楽しみながら繰り返し遊んでいた。塊の泥を全部使ってしまうと、「明日の分もつくろう」「もっと大きしようかな」と言って泥を丸め、トレイに並べ始めた。それを見たB児も「やってみよう！いれて！」と言って他のトレイに丸めた泥を並べ始めた。

翌日、バケツやトレイを遊びに必要な数を用意しておくと、子ども達同士で「バケツに水入れよう」と、遊ぶ準備を始めた。泥の塊を手に乗せたままバケツの中に入れ「あ！溶けた！」「ざらざらする」と感触を楽しんだりしながら遊ぶ様子があった。



#### <考察>

家庭での経験が遊びの中で生かされ、子どもの発見や気付きにつながっていた。泥が落ちた時になくなったと感じた子どもの思いに寄り添い、保育者が澄んだ水を使うことを提案したことで、泥が溶けるおもしろさを目で見て感じられたと思う。環境を整えることと共に、子どもたちが生活の中で体験したことと遊びがつながるような保育者の声かけで、より子ども達は楽しさを深めているように感じる。

#### 【4歳児】 12月 いらっしやいませ

(ねらい) 様々な素材や材料を知って、本物のような感触のお菓子をつくることを楽しむ。  
自分がつくったお菓子を友達や保育者にお客さんに買ってもらうことを喜ぶ。

夏頃から様々なお菓子をつくって、机に並べお店屋さんごっこを始めた。初めは、切った画用紙を空き箱に入れてお菓子に見立てたりしていたが、2学期になり製作にも慣れてきたので、様々な素材を用意したところ、自分で素材の感触を感じながら、本物のお菓子に似ている素材を選んでつくろうとする姿が見られるようになってきた。「おだんごは触ったらやわらかいほうがいい」と言って綿を花紙に包んだり、「くだものカップケーキできた」とアルミカップに丸めた折り紙をのせて、さらに上に飾り付けたりしていた。保育者も「やわらかくて本物みたいだね」と工夫しながらつくる様子を認めていった。次第にたくさんお菓子ができると、「お店屋さんの帽子がいる」「レジもつくらないと」「お客さんの財布は何個あったら足りるかな」と必要なものを考えながらつくり遊ぶ姿があった。お客さんにはどうやって知らせるか、いつからお店屋さんを開けるのかを子ども達に聞くと、5歳児が秋の遊びで招待状をくれたことを思い出し、にじ組さんと園長先生へお知らせの手紙を書いた。

お店屋さん当日、5歳児が保育室へ向かってくる姿が見えると、「にじ組さん来た!」と急いでお店の持ち場に戻り、そわそわしながら楽しみにする様子があった。年長児が入ってくると「いらっしやいませー!」と大きな声で出迎え、「これが今日のおすすめの大福です」と自分達がつくったお菓子を勧める姿があった。



#### <考察>

今回の事例では、素材との出会いという部分が主体的に活動する姿に大きくかかわってい

るように思う。入園した当初は用具の使い方がまだ慣れないことから、素材としては画用紙を主に使っていたが、少しずつ子ども達も用具に慣れ、つくりたいものに合わせた素材を用意することにした。子ども達が新しい素材と出会い、感触を感じて、こんなお菓子をつくりたいとイメージすることで遊びが広がっていった。自分たちが思いを込めてつくったものだからこそ、お客さんが来た時に自らお菓子を勧めたり、呼び込みをしたりする力になったのではないかと思う。

【5歳児】 11月 六条フェス、オープンします！

(ねらい) 共通の目的をもった友達と考えを出し合いながら、役割分担をして積極的に遊びを進めていく。

・10月に小学2年生がつくった手作りおもちゃで遊ぶ交流をきっかけに、自分達でも遊びのコーナーをつくりたいと思いおもちゃづくりが始まった。どんなコーナーをつくるかクラスで話し合い、必要な材料を考えた。「ホッケー楽しかったからつくりたい」「ホッケーの持つところはペットボトルでつくっていたよ」「ガチャガチャは段ボールでつくりたいな」と思いを出し合い、グループに分かれてつくることになった。

・役割分担をしながらつくれるように、「グループの友達と作戦会議をしよう」と声をかけるとそれぞれのグループごとに「ホッケーの持つところつくりたい」「じゃあ、ホッケーの玉をつくるね」と話し合いながらつくり始めた。

ホッケーをつくっていたA児が「ホッケーの台を机にして壁を段ボールでつくったけど倒れた」と友達や保育者に伝えた。



B児が「ガムテープを両方(両側)に貼るのはどう?」と試してみるが、うまくいかなかった。諦めずに考えを出し合ってほしいと思い、「段ボールだけだとぐらぐらして立たなかったね。何かもう一つ材料があれば立たないかな」と問いかけると別のグループが使っている材料や保育者が出した材料を見て、「段ボールをもう一つ貼る?」「空き箱とか牛乳パックは?」とアイデアが出たのでそれぞれ試してみた。段ボールは倒れ、空き箱だと大きさがバラバラで遊びにくいことがわかり、牛乳パックで壁をつくることになった。牛乳パックを試して机に貼って遊んでみると壁は倒れず、遊ぶことができた。

・コーナーができてくると、4歳児を招いて一緒に遊びたい思いが出てきて、2年生がしてくれたことを思い出し、招待状を書いたりスタンプカードをつくったりした。また、「六条フェス」という名前を考えて、フェスでは踊ったり、遊んだりすることをみんなで共有し、ステージづくりも始まった。



・オープンすると積極的に「六条フェスオープンします!」「いらっしゃいませ、ホッケーです」「楽しいですよ」「3回勝負です」とお客さんとのやり取りを楽しんだり、遊び方を積極的に友達や4歳児に伝えたりしていた。

#### <考察>

小学校との交流がきっかけとなり、楽しかった遊びの経験や小学生との関わりから今回の遊びにつながった。どんな材料を使ってつくるかクラスで話し合うことで、友達の思いを受け止めたり、自分の言葉で思いを伝えたりしてつくることができた。保育者も友達と一緒に

に一つのものを完成させたい思いに共感し、子ども達の声を受け止め、材料用意したり一緒に探しに行ったり、コーナーを2部屋に分けたことで、よりアイデアが膨らみ、様々なコーナーができあがった。また、「こあら組さんを誘いたい」思いを受け、職員間で連絡を取り合い、誘い合って遊べる時間を設けたことで、小学生にしてもらったことを再現し、自信へと繋がった。

## 5. 研究の成果

子ども達が主体的に遊ぶ姿は、環境構成と共に保育者の関わりが大切だということが事例から見えてきた。子ども達の遊びが深まっていく時に、「こうしたい」という思いがあって実現ができにくい時にこそ、子ども達のイメージを身近なものに結び付けていくきっかけや、子ども達がやりたいと思っていることをどのように進めていくかなど、保育者が小さなきっかけを投げかけることで、子ども達が自分たちで考え主体的に動き出そうとする姿があったと感じる。

年齢によって発達段階、個々の育ちによってイメージのもちかたや、遊びの進め方に対する考えは違う。保育者はその時の子どもの気持ちに寄り添い、姿を読みとりながら関わることで、子ども達の主体的な姿へつなげると考える。

子ども達が保育者とのかかわりの中で遊びが更に発展しようとする時、子ども達のイメージに合う素材や材料、用具など十分な数がなければ、遊びが止まってしまうことも考えられる。遊びを見ながら、必要なタイミングでイメージに合う物を子ども達が使えるように、揃えたり、時には子ども達と一緒に必要なものを探したり、選んだりできる環境を整えたりすることも大切だと考える。

## 6. 今後の課題

この1年、子どもたちが主体的に遊ぶための、保育者の関わりや援助、環境構成の大切さについて探ってきた。その中で保育者の与えるきっかけが結果を早急にもとめてしまう関わりになっていないかということや、保育者との関わりだけでなく、友達同士での関わりも大きく影響しているのではないかと感じる場所があった。子ども達同士が関わることで、保育者との関わりとは違う気付きや進め方もあると思うので、友だちとの関わりという部分に目を向けながら遊びを見ていきたい。また保育者の関わり方が子どもの思いと同じ速度で寄り添えているのか、改めて関わりや援助の方法についても考えていきたい。